３　「」　─近世の随筆

16年度　駒澤大学

★　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

やんごとなき人ありけり。茶ア立つることを好みて、かの易が流れをみて、かれがたる器など多く取り集め、佐より今の代々の作らせたやうのものまでもかくることなく備へしなどと、みづから負ひたまひてけり。ある時、宗易が像を壁に掛けて、「かく尊びぬるは、Ⅰ我にまさる者やあらん」など、傍らの者にもａあさあさしく言ひて、茶きてイ居たまひしが、かの像より煙のごと、霧のウ立つやうにエ見えしが、宗易りて、「我はもとよりしき者なるが、ものにかかはらず、心高き気性ありければの取り用ゐたまひてけり。茶立つることは、一時のｂ心やりにてなしてもありなん、なさでもあるべきものなれど、そのころいともてあそび草となりて、さまざま心に任せ、つひには法もなく、礼もなく乱れもてゆくべしと思へば、ささやかなる道ながら、を立て、法を定めて、人にも教へものしたるを、今はいと重きことのやうにオ心得て、その道知らＸぬ者、その室に入れば、顔赤めて一言もだし得ざるやうに、人の心にみわたりしも、いと愚かなることと悲しび思ふ。さるに君はⅡ人にも数まへられたまふ身にて、我がごとき者を　　Ａ　　、この道の　　Ｂ　　をも知らで、いと　　Ｃ　　ことと心得たまふ心の低く拙きは、我もいと賤しみ思へど、Ⅲさすが流れ汲みたまふもあれば語りＹぬ。君いま心高うて、その身のほどに従ひ、なすべきことをつとめたまはば、君が手ならしつるよとて、の後も伝へものすべし。これ我よりをなすといふなり。賤しき我らの持たる器物などに、多くの財を尽くして買ひ求むるのはかなさにては、このｃささやかなる道とても、（６）心にはいかで得たまふべき」と、はたとにらむと思へば、りも覚めにけりとぞ。

＊宗易＝千利休（一五二二～一五九一）。安土桃山時代の茶人。

＊宗佐より今の代々＝「宗佐」は江戸時代前期の茶人（一六一三～一六七二）。「代々」は代々の家元の意。

＊什器＝日常に使用する家具・道具。ここでは茶道に関わる道具類。

＊太閤＝豊臣秀吉（一五三七～一五九八）。

＊式＝標準となる作法。

問１　傍線（１）「やんごとなき」の意味として、最も適当なものを、次のア～オの中から選べ。

ア　心清らかな　　イ　野心のある　　ウ　身寄りのない

エ　身分の高い　　オ　風流ぶった

問２　傍線（２）「かくることなく備へしなどと、みづから負ひたまひてけり」の意味内容として、最も適当なものを、次のア～オの中から選べ。

ア　宗易や宗佐以来の家元の茶道具を人目を気にせずに堂々と集めている、などと言って、周囲に言い触らしていた

イ　宗易や宗佐以来の家元の茶道具は何ら隠すことなく飾ってある、などと言って、あからさまに見せびらかしていた

ウ　宗易や宗佐以来の家元の茶道具はいつでも取り出せるように用意してある、などと言って、注意深く管理していた

エ　宗易や宗佐以来の家元の茶道具で自分が持っていない名品など一つもない、などと言って、自分の収集を誇っていた

オ　宗易や宗佐以来の家元の茶道具は破損したものでも完璧に補修してある、などと言って、手先の器用さを自慢していた

問３　傍線（３）「なしてもありなん」は、どのように品詞分解できるか。正しいものを、次のア～カの中から一つ選べ。

ア　なし／て／も／あり／な／ん

イ　なし／て／も／あり／なん

ウ　なし／ても／あり／なん

エ　な／し／て／も／あり／な／ん

オ　な／して／も／あり／なん

カ　な／し／ても／あり／な／ん

問４　傍線（４）「乱れもてゆくべしと思へば」の意味内容として、最も適当なものを、次のア～オの中から選べ。

ア　たぶん乱れていってしまうだろう、と思ったけれど

イ　万が一乱れていってしまうといけない、と思ったので

ウ　決して乱れていってしまうことはあるまい、と思ったけれど

エ　きっと乱れていってしまうに違いない、と思ったので

オ　まさか乱れていってしまうことはないだろう、と思ったけれど

問５　空欄Ａ・Ｂ・Ｃに入る語の組み合わせとして、最も適当なものを、次のア～カの中から選べ。

ア　Ａ　賤しみ　　Ｂ　愚かなる　　Ｃ　重き

イ　Ａ　賤しみ　　Ｂ　はかなき　　Ｃ　重き

ウ　Ａ　賤しみ　　Ｂ　愚かなる　　Ｃ　軽き

エ　Ａ　尊び　　　Ｂ　はかなき　　Ｃ　軽き

オ　Ａ　尊び　　　Ｂ　愚かなる　　Ｃ　軽き

カ　Ａ　尊び　　　Ｂ　はかなき　　Ｃ　重き

問６　傍線（５）「我より古をなす」とあるが、ここではどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から選べ。

ア　昔の物は古くさいものとして廃れていき、後世には今の流行こそが古典となって受け継がれていくようになる

イ　志を高く持って今なすべきことをすれば、後世になって、自分がよく使っていた物が尊重されるようになる

ウ　今現在は新しい物であっても、時代とともに必ず古くなっていくのであり、おのずと価値は高まるものだ

エ　その時代を生きる人々が物の価値を決めるのであり、昔の物というだけで価値が上がるわけではない

オ　自分自身の心がけ次第で、たとえ昔の古ぼけた物であっても、新たな価値を帯びるようになるものだ

問７　傍線（６）「心にはいかで得たまふべき」の意味内容として、最も適当なものを、次のア～オの中から選べ。

ア　どうして茶道の名品を継承なさることができようか

イ　どうして茶道の本質を理解なさることができようか

ウ　どうして茶道の教義を後世に伝承なさることができようか

エ　どうして茶道の礼法における差異を否定なさることができようか

オ　どうして茶道の神髄についての言説を批判なさることができようか

◎問８　次のア～オの中から、本文の内容に合致しているものを一つ選べ。

ア　主人公は宗佐より宗易を尊び、常にその像を壁に掛けていた。

イ　宗易は、自分は心の気高さゆえに太閤に引き立てられた、と夢で語った。

ウ　茶道は本来、一時の気晴らしではなく、礼儀作法を身に付けるための習い事であった。

エ　茶室に入ったら、その道に通じていない初心者は一言も発するべきではない。

オ　宗易は、自分の流派にふさわしくない主人公を破門するために、夢に出てきた。

問９　『花月草紙』は江戸時代に成立した作品である。江戸時代より前に成立した作品を、次のア～オの中から一つ選べ。

ア　おらが春　　　イ　雨月物語　　　　ウ　十六夜日記

エ　日本永代蔵　　オ　折たく柴の記

【確認問題】

１　傍線部ａ・ｂは意味として、傍線部ｃは指す内容として適当なものをそれ

ぞれ次から選べ。

ａ　ア　毎朝のように　　イ　明るく

　　ウ　浅はかに　　　　エ　はっきりと

ｂ　ア　気晴らし　　イ　気配り

　　ウ　思いやり　　エ　教養

ｃ　ア　骨董を極めること　　イ　倹約

　　ウ　伝統を守ること　　　エ　茶道

２　傍線部ア～オの動詞の活用の種類と活用形を答えよ。

ア（　 　行　　　　　活用　　　　　形）

イ（　 　行　　　　　活用　　　　　形）

ウ（　 　行　　　　　活用　　　　　形）

エ（　 　行　　　　　活用　　　　　形）

オ（　 　行　　　　　活用　　　　　形）

３　二重傍線部Ｘ・Ｙの文法的説明として適当なものをそれぞれ次から選べ。

ア　打消の助動詞「ず」の連体形

イ　打消の助動詞「ず」の連用形

ウ　完了の助動詞「ぬ」の連体形

エ　完了の助動詞「ぬ」の終止形

オ　ラ行四段動詞の一部

カ　ラ行下二段動詞の一部

Ｘ［　　　］　　Ｙ［　　　］

【補充問題】

４　波線部Ⅰ～Ⅲの意味として最も適当なものをそれぞれ次から選べ。

Ⅰ　ア　私にまさるものがいるかわからない。

　　イ　私にまさるものはいない。

　　ウ　私にまさるものがいたらどうしよう。

　　エ　私にまさるものがいるからである。

Ⅱ　ア　人を扱う立場にいらっしゃる

　　イ　人に対して一人前にふるまいなさる

　　ウ　人から半人前に扱われなさる

　　エ　人から一人前に扱われなさる

Ⅲ　ア　そうはいってもやはり

　　イ　そうであるうえに

　　ウ　そうであるならば

　　エ　それというのも実は

５　君は誰を指すか、次から選べ。

ア　宗易　　イ　宗佐

ウ　人　　　エ　やんごとなき人

【解答】

問１　エ

問２　エ

問３　ア

問４　エ

問５　カ

問６　イ

問７　イ

問８　イ

問９　ウ

【確認問題】

１　ａ＝ウ　ｂ＝ア　ｃ＝エ

２　ア＝タ行下二段活用連体形　　イ＝ワ行上一段活用連用形

　　ウ＝タ行四段活用連体形　　　エ＝ヤ行下二段活用連用形

　　オ＝ア行下二段活用連用形

３　Ｘ＝ア　Ｙ＝エ

【補充問題】

４　Ⅰ＝イ　Ⅱ＝エ　Ⅲ＝ア

５　エ

【現代語訳】

　身分の高い人がいた。（その人は）茶を立てることを好んで、あの宗易（千利休）の流れを継承して、利休が持っていた器などを多く収集し、（利休の孫の）宗佐から今（まで）の代々（の家元）が作らせた（茶道に関わる）道具類などのようなものまでも、（何一つ）欠けることなく揃えたなどと、自負していらっしゃったのだった。ある時、宗易の肖像画を壁に掛けて、「このように（宗易を）尊んでいることで、私にまさる者はいるだろうか、いるはずがない」などと、側にいる人にも浅はかに言って、茶を挽いて座っていらっしゃったが、その肖像画から煙のごとく、霧が立つように見えたところ、（その中から）宗易が出て来て、「私は元々身分の低い人間だが、物にこだわらず、高尚な心があったので、太閤様が（茶道の師として）取り立て用いてくださったのだ。茶を立てることは、一時の気晴らしであって、（心して）やっても続くに違いないし、やらなくてもあり続けるはずのものではあるけれど、その当時たいそうもてはやされた娯楽となって、それぞれの思いに任せ（茶道が継承され）、しまいには決まりもなく、礼儀もなく、きっと乱れていってしまうに違いない、と思ったので、（茶道は）ささやかな道ではあるけれど、作法を確立し、決まりを定めて、人にも教えていたのを、今ではとても重々しいことのように理解して、その（茶の）道を知らない者は、茶室に入ると、顔を赤くして一言も話すことができないように、（厳格なものだと）人の心に思い込みが広がったのも、たいそう愚かなことだと悲しく思う。それなのにあなたは人から一人前に扱われなさる身で、私のような者を尊び、この（茶の）道が大したことのないものであることも知らないで、大変重いことだとお思いになる（あなたの）心が低俗で愚かなのは、私もひどく卑しいと思うが、そうはいってもやはり（私の）流派に属しなさっている縁もあるので（あなたに以上のことを）言ったのだ。あなたがもし志高く、その身に応じて、なすべき務めを果たしなさるなら、あなたが使いならした道具だよと言って、千年の後も伝え（られ）残るだろう。これを自分（の心がけ次第）で伝統になるというのである。卑しい自分たちが持っていた道具などに、多くの財産を尽くして買い求めるむなしいこと（をして）は、この大したことのない（茶の）道といっても、どうして心で理解がおできになれようか、おわかりになるはずがない」と言って、（宗易が）きっとにらんだと思うと、（この男は）眠りから覚めてしまった（ということだ）。